

---

---

研究ノート

---

---

## ハーバート・バターフィールド『歴史小説』を読む

——政治をめぐる思索の始まりとして——

西村 邦行

目次

はじめに

1. 歴史小説の効用と歴史学の限界

(1) 再現しがたいものとしての生

(2) 事実とリアリティ

2. 個・実存・共同性

おわりに

### はじめに

バターフィールドの最初の著書である『歴史小説 (*The Historical Novel*)』(1924年)は、短い作品だということもあり、彼が著したもののなかではマイナーである<sup>1)</sup>。実際のところ、そこで提示されている議論も、洗練されたものだとは言いが

---

1) 例えば、M・R・ソープの作品は、未公開史料も駆使した先駆的なバターフィールド研究の一つだが、そこにおいて、『歴史小説』は、伝記上の事実に触れるために言及されるだけであって、その中身が詳細に検討されることはない。M. R. Thorp, *Herbert Butterfield and the Reinterpretation of the Christian Historical Perspective*, Edwin Mellen Press, 1997, p.12. K・B・マッキンタイアの著書も、バターフィールド研究における主要な二次文献の一つであるが、そこにおいて、史家が著した「学術的な歴史の最初の作品」は『ナポレオンの講和策 (*The Peace Tactics*

たい。話が行き来する結果として論点の繰り返しが多く、叙述の構造には改善の余地が大きいに思われる。優れた評伝の著者である M・ベントリーが指摘しているところによると、バターフィールド自身、この書には低い評価を与えていたし、後年の彼は文芸ジャンルとしての歴史小説を嫌ってもいた。同書は近代史講座担当者 H・テンバリーからの影響を残していた時期の未熟な作品にすぎない、というのがベントリーの結論である<sup>2)</sup>。

バターフィールドを文学的な歴史家と捉えて『歴史小説』にその証拠を見いだそうとする人々は、確かに、誤った努力を行っていると言うべきなのかもしれない。ベントリーが強いて上記の事実を指摘するのも、そうした試みが巷間で為されてきたことを念頭に置いてのことである<sup>3)</sup>。科学的な知と文学的な知との緊張関係は、1950年代末からのいわゆる「二つの文化」論争においてイギリス史上に象徴的な表現を見た<sup>4)</sup>。そうした科学派と文学派の角逐は、——これ自体、問題の根を過去に探ろうとした結果としてでてくる歴史理解であるのかもしれないが——既に1920年代に J・B・ビュアリと G・M・トレヴェリアンとのあいだで演じられていたとされることが多い。しかし、『歴史小説』が書かれた当時にも「文学か科学か」という議論が展開されていたのだとして、そこから導きうるものとは言えば、歴史小説が懸賞論文のテーマとされたのもそうした時代状況があったからかもしれない、という不確かな推論くらいである。少なくともバターフィールド本人は、自らの著述が「歴史家に対抗して歴史小説を擁護するものではない」ことを明言している<sup>5)</sup>。やはりベントリーが明らかにしているところによると、労働者階級出身で特

---

of Napoleon)』(1929年)であるとされており、『歴史小説』は書名すら挙げられないことがない。K. B. McIntyre, *Herbert Butterfield: History, Providence, and Skeptical Politics*, ISI Books, 2011, p.x.

- 2) M. Bentley, *The Life and Thought of Herbert Butterfield: History, Science and God*, Cambridge University Press, 2011, p.45.
- 3) 例えば, S. Lottinville, “Sir Herbert Butterfield as a Narrative Historian,” in *Herbert Butterfield: The Ethics of History and Politics*, ed. K. W. Thompson, University Press of America, 1980, p.21. ここでは、バターフィールドの歴史叙述が持つ散文的側面を浮かびあがらせるに際し、『歴史小説』という作品が著されたという事実が挙げられているのみで、その中身についてはそもそも検討が為されていない。
- 4) G・オルトラノ『「二つの文化」論争——戦後英国の科学・文学・文化政策』増田珠子訳、みすず書房、2019年。
- 5) H. Butterfield, *The Historical Novel: An Essay*, Cambridge University Press, 1924, n.p.

段の後ろ盾もなかったバターフィールドは、未だ研究生という身分にあって、生計を立てるためにも賞を獲得する必要があったという。この事情に鑑みれば、上の言葉を文字どおりに受けとって、バターフィールドは機会を捉えようとしたただだと考えるのが、理に適っているのではないと思われる。

ただ、テキストを読み解くにあたって、著者の真意がどこにあったのかは必ずしも重要ではない。ここで問題としたいのも、『歴史小説』のテキストそれ自体は別な読みに関われているという、その点である。この作品には、バターフィールドが歴史なるものを通じて何を問いたいのかを明らかにしている面がある。そこで導きだされている答えは、彼が後に掲げることとなるものと同じではない。ただ、そこに浮かびあがらせられている問いは、彼が後に取り組んでいくところのそれへと通じている。彼が歴史小説に高い評価を与えたかどうかは、問う必要がない。いま心に留めておきたいのは、歴史小説について論じるにあたって、歴史なるものに関する特定の理解を投影しないなどということがおよそ不可能だという点である。実に、同書においては、政治が人間の諸活動に占める位置についても一定の見解が示されている。そして、これらの点に関し、『歴史小説』に込められている問題関心のあり方が後のホイッグ史観批判——さらには、それに続く歴史哲学的—政治哲学的思索——を予告している様子は、テキスト上の根拠をもって示すことが可能である。以下では、『歴史小説』が有している歴史哲学上の示唆について、政治思想としての含意をも明らかにしながら、一つの読解を提示してみたい<sup>6)</sup>。

## 1. 歴史小説の効用と歴史学の限界

### (1) 再現しがたいものとしての生

『歴史小説』の構成はあまり明確ではない。それでも、大まかに次のような流れがとられているとは言える。まずは短い序論において、作品の目的が、「再生の一

---

以下、同書を参照する際はHNと略記することで書誌情報の記載に代える。

- 6) 先行諸研究のなかにあって、K・C・シーウェルの著書は、『歴史小説』についての詳細な検討を含む例外的な作品である。ただし、同書においても、『歴史小説』はあくまで歴史哲学上の関心から読み解かれており、同書の政治哲学的な含意に焦点が当てられているわけではない。K. C. Sewell, *Herbert Butterfield and the Interpretation of History*, Palgrave Macmillan, 2005, ch.2.

営為として、「歴史」の一形態として、過去を扱う一方法として、小説を評価しようとする」ことにあるとされる<sup>7)</sup>。続く本論は三部に分けられている。第一部では、歴史叙述が描きえないものでも歴史小説であれば表現しうることが強調される。続く第二部へと進むと、歴史小説は歴史と結びつくことで他の小説にはない利点を獲得しうるのでとされる。最後に、歴史小説の持つ価値について整理が行われる。以下、原則としてこの順序に沿いながら、バターフィールドの問題意識を掘り起こしていこう。

バターフィールドが言うところ、歴史小説なるものは、歴史を想起させたり歴史上の事実を筋書きに含みこんでいたりさえすれば当該の名に値する、というわけではない。「……真の「歴史小説」は、単に偶然によってではなくその意図において歴史的であるもの、過去にどっぷりと浸った精神から生じてくるものである<sup>8)</sup>」。歴史小説は、虚構ではあるにせよ、過ぎ去った時代を描こうとする。序論でも触れられていたように、歴史小説は歴史の一ジャンルでもあるわけである。

では、過去を知ろうとするにあたり、学としての歴史とは別にこうしたジャンルが求められることとなる理由とは何か。歴史叙述には描きえず歴史小説において表現しうるものとは何か。この点を説明するために、バターフィールドは、歴史家とはどのような存在かを述べるところから始める。歴史家にとって、過去は、それ自体として追い求められ、そのまま再現されることが望ましい。「歴史はそのとき、己を振り返って見ているところの世界、状況そのまの姿であるところの記憶を溜めこんだ世界を意味する。歴史とは、旧い世界が追憶を始める際に語りうる、あらゆる物語のことである。それはまさしく世界の記憶 (Memory) なのである<sup>9)</sup>」。ところで、過去をありのままに再現したいというこの姿勢は、純然たる知識欲のみによって生じるものではない。過去それ自体なるものを恋い焦がれる姿勢は、人が「一般にロマン主義と呼ぶであろうもの」であるが、そうした「ロマン主義は、根底において、消えてなくなってしまったもの、二度と起こりえないことへの嘆息である<sup>10)</sup>」。歴史とは、一面において、感傷の産物なのである。「年寄りたちを炉端に集わせては古い時代の物語を語らせ、鍛えぬいた英雄たちを再び戦わせたがるの

---

7) HN: n.p.

8) HN: 5.

9) HN: 8-9.

10) HN: 9, 10.

が、ロマン主義である<sup>11)</sup>」。

こうして、歴史には、ある種の情念を原動力として追い求められる面がある。では、歴史家はどのようにしてこの情念を満たすことができるのだろうか。上に引用した言葉からすると、世界の記憶としての歴史というのが、歴史家の理想ではあった。この文言だけを見ると、バターフィールドが理解するところの歴史とは、ひたすらに事実を蓄積していくことを目指す、一九世紀の完成主義的なそれであるかのようにも映る。ただ、実際のところ、そのような夢が叶うことはないというのが、バターフィールドの見立てである。この時期の彼は未だ、客観的なものとしての事実という観念は保持していたのかもしれない。しかし、同時に、歴史とはやはり何かしらの解釈であると捉えてもいた。

彼の立場をこのようなものだと理解すべき根拠は、以上で参照した叙述に先立つ箇所にある。歴史像というのは一般に、歴史小説などの素材をも手掛かりとしながら、一つの物語として紡ぎだされてくるものである。そのようにして生成される個々の歴史像は、ひるがえって、人々が過去をどのように見るのかを規定することとなる。歴史像なるものがこうしたイメージの産物であることの意味を、バターフィールドは次のように述べる。「私たちは、意識的な研究を通じてそれを修正し訂正しようとするかもしれないが、それを逃れることはできない<sup>12)</sup>」。自覚的に注意を保ったところで消し去りえない。そうしたものが、歴史にはつきまとう。実証的な歴史研究にすらも、「無意識の偏見と明言されざる感傷」とが伴ってしまうこととなる<sup>13)</sup>。

こうした表現に注意してみると、バターフィールドが展開しているのは、歴史小説という題材を通じて歴史の領分を明らかにする思索だと、解釈することができる。実際、バターフィールドに言わせれば、「歴史小説とは一つの融合である。それは、異なる技芸の結合から生まれる諸々の技芸の一つなのである<sup>14)</sup>」。歴史は人間が行う営みの一つとして固有の特性を持つ。それは、創作物語によって取って代わられるものではない。ひるがえって、その固有性は、感傷を埋め合わせることへと向けられるものではない。「ひとたびロマン主義者が自らの〔失われた過去を取り戻したいという〕この企図を見つめ、自らの信条を告白し、自身が真に求めて

11) HN: 11-12.

12) HN: 2.

13) HN: 3.

14) HN: 6.

いるこのものと自ら向き合ったとすれば——つまり、自らの心が渴望しているものを彼が理解したとすれば——、途方もない真実が彼の下へと舞い降りてくるに違いない。すなわち、歴史の不可能性という真実が<sup>15)</sup>。感傷を埋め合わせることは、むしろ小説の側の仕事である。

ここに、歴史小説が表現しえて歴史叙述には描きえないものが浮かびあがってくることとなる。歴史家は様々な史料を用いて過去を明らかにしようとする。ある国がある時期に経験していた状況の一面は、ときに統計的な数値をも伴いながら明らかにされることだろう。「しかし、それらは、生からはほど遠い<sup>16)</sup>」。例えば、何気ない一日に友人と笑いあった情景は、いかに人間味に満ち、その当人たちにとっては価値のある過去なのだとしても、歴史のなかから掬いあげてを望みがたい。「ことさらに内輪だけの親密な間柄における個人的な事柄は、歴史家の手から零れ落ちていく。私たちの内なるロマン主義者が渴望する歴史。私たちと同様に世界と戯れたのであるがはるか昔に世界を去った人々の、その脈うつ心に触れたいという欲求。これは世界で最も捉えがたいものについての探求である<sup>17)</sup>」。こうした欲求を満たそうとすれば、想像力に頼って空隙を埋めざるをえない。いささか逆説的ながら、過去をありのままに知ろうとするそのときにこそ、虚構が入り込むのを避けることは難しい。「私たち皆に存在しているところの過去、私たちの心のうちにある過去の世界は、想像力によって統合された歴史なのである。それはまた、要は創作物であるということになるところの何かによって一枚の絵へとつなぎとめられた歴史なのである<sup>18)</sup>」。

## (2) 事実とリアリティ

歴史小説には、学としての歴史よりも鮮明な形で過去を活写しうる面がある。裏返せば、学としての歴史には、生をありのままに汲みとることができないという制約がある。以上が、概ね第一部で展開されている議論である。歴史が持つこのような限界は、以降でも形を変えながら掘り下げられていくこととなる。

続く箇所では、歴史小説が持つさらなる利点が明らかにされていく。歴史小説

---

15) HN: 13-14.

16) HN: 14.

17) HN: 15.

18) HN: 22.

は、過去の生を鮮やかに描きうるという点で、歴史学よりも優れている面があるだけではない。歴史小説には、小説の形式として、人の生を描きだすことに秀でている面がある。というのも、そこで主役を張るのはしばしば、歴史に名を残す公的な人物だからである。そうした偉人は、常人よりも濃密な生を送っている。世の中には、「他の人々よりも激しく生を感じ、大半の人が立つことのない経験の高みに達する人というのが、いるものなのである<sup>19)</sup>」。そうした生を経験する偉人については、様々な情報も記録として残りやすい。「ある人物が公的な生において記憶に値するということになれば、その人物の私的な生の方も、記録されずには、また記憶されずにはいないであろう……<sup>20)</sup>」。結果として、歴史小説は、人の生とはどのようなものなのかを描きだすにあたり、一般的な人間をめぐって残されるよりも多くの事実を手掛かりにとることができるわけである。

以上が第二部の概要と言って差し支えない。ただ、注目したいのは、バターフィールドがこの結論へと辿りつくまでに経ている、曲がりくねった思索の過程である。そこでもやはり、歴史という領野がどのように輪郭づけられ画定されるのかが語られている。

第二部の議論は歴史小説の限界を指摘するところから始まる。歴史小説において舞台を成す時代の情景が描きだされるとき、「小説家はその時代の特異なあり方を常に裏切っているに違いない……<sup>21)</sup>」。というのも、想像力によって生を描きだすという、小説に固有なその手法に鑑みた場合、歴史小説はある種の真実を描くとしても事実を描くわけではないからである。「それは、時代の精神に忠実である。それは、過去を遠い国として描きだすかもしれない。しかし、それは、過去の実際の出来事とは何も関係がなく、物語の連なりと見なされるところの歴史とは何も関係がないかもしれない<sup>22)</sup>」。小説はリアルさを求めるであろう。しかし事実を求め

19) HN: 69.

20) HN: 70.

21) HN: 45.

22) HN: 50. 本稿で物語という語を用いる際、story か narrative かを峻別してはいないが、引用に際して原語がどちらなのかを明確にした方がよいと思われた場合は、前者の訳語にルビを振っている。本稿著者が理解するところ、そこにおいてバターフィールドが用いている story の語義は、「時間の進行に従って事件や出来事を語ったもの」という E・M・フォースターの古典的な（また、『歴史小説』と同時代に現れた）定義に合致するものである。E・M・フォースター『E・M・フォースター著作集 8 小説の諸相』みすず書房、1994 年（原書は 1927 年）、40 頁。

るわけではない。歴史上の諸事実はむしろ、リアリティを高めるために持ち込まれる。「[物語に] 関係する物事は本当に起こったのだと読者に感じられるとき、その物語が語っているところの人物は——その人物についての物語すべてが事実ではないかもしれないとしても——本当に生きたのだと読者が感じることができるとき、……作品は最も効果的な形で現実をつかみとっているのである<sup>23)</sup>」。リアリティのためであれば歴史は恣意的に描かれてよい、というわけではない。事実からの乖離が甚だしい場合、リアリティはむしろ小説から失われてしまうだろう。リアリティを高めるためにも、可能な限り事実に接近することが必要となる。「現実立足を据えることができたとき、話はもはや雲の上にあるのではなく、現実性とのあいだにつながりを打ち立て、さらなる力をえることとなる<sup>24)</sup>」。

歴史小説は、当該ジャンルであることの必然として、歴史なるものの特性から制約を受ける。他方、どのような小説であれ、適切な筋立てに沿って物語性を帯びさせるためには、事実を取捨選択することが必要となる。それは、過去をリアルなものとして提示するというまさにその目的に照らせばこそ、不可欠な作業でもある。「実際に起こったことのいくつかをただ単に物語のなかに含めるなどということ、歴史のかけらを引っ張りだしてきて小説の形へ継ぎ接ぎしようと試みるなどということは、脚注をつけ、「この出来事は実際に起こったのだ」と読者に知らせたとしても、正当化されるものではない。事実は読者の関心を惹くかもしれない。しかし、それは、小説が呼び起こすのとは異なる種類の関心である。そして、それは、完全なまとまりを持つものとしての小説をめぐるて為されるところの、その全体をめぐる評価に対し、何ら影響を与えるものではない<sup>25)</sup>」。

では、歴史と小説とはどのような程合いで結びつけられることが望ましいのだろうか。バターフィールドは、アレクサンドル・デュマ（大デュマ）の作品を歴史小説の好例とする。曰く、フランスの史実が備えている物語性の豊富さも、彼の作品の完成度を高める結果となってはいる。とは言え、歴史と小説の統合を図っているのはそれでもデュマ自身である。その成果として、彼が生みだした諸作品は、過去をリアルに伝えている。

この一連の叙述の詳細はここでは措こう。いま重要なのは、その最後の場面に於いて突如、デュマが何を描けていないのかが長々と記され始めることである。

---

23) HN: 52.

24) HN: 51.

25) HN: 55-56.



それらはフランスの姿そのものではない。デュマの眼は、フランスの情景を広く見渡すものではない。彼の眼は、フランスの情景全体を見るものではないのである。諸人民が織り成す海原の深みを持った音色は、彼の書を通じて響いてはこない。フランスの大いなる生はそこにはないのであって、彼の書は、宮廷や兵舎の騒がしい出来事を広める共鳴板のようなものである。民衆運動の浮き沈みは、それらの出来事をすり抜けて押し寄せてはこない……。……彼が扱っているのは、その時代において重要であった人々である。彼が扱っているのは、実際に生きられた生ではあるが、フランスにおいて価値があったと見なされた生である。過去の昏い群衆のうで強い光を浴びて存立していた部分、それゆえに歴史が諸々の事柄を記憶することができた部分について、彼は扱っているのである<sup>26)</sup>。

歴史小説が持つ利点については、第一部を要約する形で既述した。ここで描かれているのは、その裏面である。では、これは歴史小説が持つ限界なのだろうか。一面では確かにそうである。しかし、より正確に言うと、これもまた歴史が抱え持つ限界だと言うべきであろう。過去の出来事は潜在的にはすべて歴史として後世に残りうるとしても、個人的な印象といったものは消え去ってしまうのが常なのであった。実際に歴史に残されるものは限られている。歴史的に重要なものだけが残されるのである。では、歴史的に重要なものとは何か。それは、往々にして、公的な人物の事績である。歴史小説にしても、現実の歴史からリアリティを引きだすうでは、歴史が主として公的世界についての叙述であるという事情から制約を受けることとなる。歴史小説の限界をもたらしているのは、歴史小説が省みなければならないところの歴史、その歴史なるものそれ自体が持つ限界なのである。

実のところ、歴史小説にとって、これは限界ですらない。というのも、歴史小説は、自らの本領を発揮するうで、この制約を糧にしさえするからである。先述したように、公的な人間に関する記録は豊富である。歴史小説は、そのおかげで、人間の生を描きだすという目的を上手く達成できるのである。どれだけ史料が豊かであったとしても、過去の諸事実を余すところなく正確に描くことはできない。しかし、歴史小説にとってそのことは、そもそも問題ではない。歴史小説は過去を描く

26) HN: 64-65.

こと自体を目的とはしないからである。歴史小説とは、公的な歴史に身を投じた人物を通じて、その人物によって体験されたところの生を描くものである。「こうして、政治家や王や科学者は小説から締めだされはしない。ただ、彼らに対する小説家の関心は、国政術や、統治や、科学にあるのではなく、それらの背後にあるその人物の人格全体にある。彼のテーマはやはり、世界に捕えられ、時代と状況に絡めとられた、人間の心なのである<sup>27)</sup>」。あるいは、この裏返しとして、歴史小説においては、個性が歴史に与える影響が印象深く描かれなければならないということになる<sup>28)</sup>。

## 2. 個・実存・共同性

ベントリーの著作と並ぶ優れたバターフィールド伝の著者、C・T・マッキンタイアに言わせると、「……全体として、この書『歴史小説』において、彼[バターフィールド]は文学の側に生きることを至高とし、歴史は相対的に表層的であると捉えている<sup>29)</sup>」。この評価が的確かどうかは議論がありえよう。ただ、こうした評価が現れるのもまた、『歴史小説』において、学としての歴史が抱える限界が明らかにされているためだとは言えそうである。歴史は、生を描きえず、民衆を描きえない。歴史学が語りうるのは、公的な出来事についての乾いた事実ばかりである。

ここでバターフィールドが暗に採用しているのは、政治史こそが歴史学であるという、ランケ以来の史学に認められてきた発想なのだろう。この理解は、今日ではかえって特異に見えうるとしても、当時の知的文脈からすれば珍しいものではない。そもそも、いま問題にすべきは彼の独創性ではない。ここで確認しておきたいのは、歴史小説とは何かをめぐってバターフィールドが展開している思索の全体が、公と私の緊張関係に関わっているというその事実である。少し視点を変えて言うならば、そこでは個人と個人を超えるものとの緊張関係が問われている。

バターフィールドが見るところ、歴史が物語られ始める背後には失われたものへ

---

27) HN: 70-71.

28) HN: 75.

29) C. T. McIntire, *Herbert Butterfield: Historian as Dissenter*, Yale University Press, 2004, p.33.

の感傷があった。また、そうして想像力が入り込んでしまうものとしての歴史は、どこかでまとまった物語へと仕立て上げられなければならない代物でもあった。実のところ、議論の始点にあったこの発想からして、歴史なるものを個人の視点から捉えた結果である。ヴィクトル・ユーゴーの作品を念頭に、バターフィールドはこう説く。「私たちは、個々の生において、起こったことを思いだして満足するわけではない。単に記憶を持ってそこで終わりというのではないのである。私たちはそれらの記憶を互いに関連づけ、それらに意味を見いだし、それらを経験へと練りあげる。そうした経験を通じて、私たちは、生を、まとまりのあるもの、目的を有するもの、一つの過程であるところのものとして捉えるようになるのである<sup>30)</sup>」。歴史もまた、個々の人間がつかみとろうとするものである。そうであればこそ、歴史は、ここで述べられているのと同じ感覚から、まとまりを持ったものとして描かれる必要がある。「同様に、歴史が単なる追憶以上の何かでなければならないときがやってくる。この時代やあの時代についての、ある出来事と別の出来事についての、こちらのある人物とあちらのある人物についての記憶以上の何かでなければならないときが。それは、一つの鎖、これらが一続きになったものをさえも超える何かでなければならない。それは、それらすべてが編みあわされたところの一つの織物、一つのまとまりでなければならない<sup>31)</sup>」。こうして、歴史は個人のありふれた感覚の延長線上において紡ぎだされてくるものだということになる。

しかし、ここに逆説的な状況が立ち現れてくる。そうして物語へと昇華されていくところとなった歴史が描きだすものは、究極的には、「自然 (Nature) と対峙した、この地上における人間 (Man) の経験でなければならない」のである<sup>32)</sup>。そうして歴史が「人間の叙事詩 (the Epic of Man)」にまで至りつくとき、個々人は舞台から退いていく<sup>33)</sup>。「このやり方で過去が眺められると、個人は焦点ではなくなっていく<sup>34)</sup>」。物語性を高めた歴史叙述は、個々の事象を描きはする。しかし、それが真に描いているのは、そうした個々の事象の背後にある原理である。人間の作為を超えた所与の何かである自然、そうしたものに包まれたこの世界はあたかも、独自の生命活動を行う有機体であるかのようなものである。その超越的な存在を前に

---

30) HN: 82.

31) HN: 82.

32) HN: 82.

33) HN: 83.

34) HN: 83.

して、人間が持ちうる自律性はか細い。ひるがえって、歴史小説が描く生がリアルなものになりうるのは、そうしたか細さが輝きを放つときである。「それは、運命 (Destiny) と取っ組み合い、勇猛にも宇宙を正面から見据える。それは、宿命 (Fate) をはっきりとさせて、星の巡りに打ち掛かるのである<sup>35)</sup>」。

一連の叙述に宗教的な響きがあることは、とりあげられている対象がロマン主義者ユーゴーであることからすると、不自然ではないのかもしれない。ただ、そもそも歴史とはロマン主義的な動機に発するものなのだと説くバターフィールド自身にしても、例えば歴史とは世界の記憶なのだと述べる際に大文字の記憶 (Memory) を持ちだすなどしていた点は、上述したとおりである。実に、彼が見るところ、歴史小説の主役を張るような稀有な人物というのは、人間の理解を超える諸事象の運行に顕著な形で巻き込まれた人間のことなのであった。彼らは、「精神や心に備わっている何かしらの固有な偉大さゆえにはなく、死すべき私たちには計り知れないものとしかみなしえぬもの、<sup>インカルキュラブル</sup>「偶然」<sup>チャンス</sup>としか呼びえないもののために、例外的な環境や目新しさのある状況に置かれ、経験なるものの新しい要素であったり生の新たな問題であったりに突きあたったのである<sup>36)</sup>」。

公的な世界に身を投じた偉人が歴史小説において描きだされるとき、そこで詳らかにされるのは、彼らが関わった政治や科学のあり方ではなかった。光に照らされるべきは、人間の生であった。いま、その人間の生は、自らを超えた力とのせめぎ合いにおいて、真価が立ち現れてくるものとされている。再びユーゴーを論じている文脈へと戻るのであるなら、同じことは集団としての人間についても言えるだろう。抑圧されているという意識に目覚めた民族が自立を求め始めるとき、「自由への愛は、熱望、大望、展望として現れてくる」ことになるが、「これほど小説の動機になるものは他にない<sup>37)</sup>」。ままたらぬ力に抗って自律性を示そうとする姿にこそ、人間の生の輝きは認められるのである。

こうした理解は、公と私のあいだで引き裂かれた時代の人間に、とりわけよく当てはまるものである。私たちの多くは、何か自分を越えたより大きな世界があるということをぼんやりと感じつつも、自らの閉じた世界へと引きこもりがちである。大きな世界は、どこか縁遠いものであって、日々の生活に直結しているという感覚を持ちがたい。「私たち皆にとって、生とは、私的な目的、個人的な関心、家族や

---

35) HN: 85.

36) HN: 69.

37) HN: 87.

家庭の事柄の連鎖であって、次々と到来しては過ぎ去っていくそれらが、私たちに  
 としては世界のすべてであるかのようである。しかし、そのはるか上方には、私た  
 ちの些細な関心になど気づくことなく、私たちのちっぽけな生に目を向けることの  
 ない、より大きな歴史上の事柄が動いているのを、感じるができる。ほんの稀  
 にしか、私たちの道は交わることがない<sup>38)</sup>」。一方では個人としての力量を發揮し  
 ながらも、他方では大きな力に翻弄されてしまう偉人のあり方は、こうした意味に  
 おいても、生のリアリティを感じさせる。登場人物の心境に関心を傾けて小説を読  
 み進める最中、歴史上の様々な出来事に関する叙述が物語を中断させるかのよう  
 に感じさせる場面がある。そうして世界の流れに呑み込まれてしまうという状況は、  
 私たちが現実の生で経験していることでもある。「読者が、その運命に興味をそそ  
 られていたところの人々を見失い、生の夥しいうねりのなかで途方に暮れて無力で  
 ある彼らを折に触れて見つけるという以上のことができなくなったとして、それ  
 は、現実の生活においてかかる洪水が彼らを洗い去ったとしたならば彼らに起こっ  
 たであろうことなのである<sup>39)</sup>」。

私たち個々人の生は、自身にはままならない何ものかの手によって動かされて  
 いる。そうした大きな力が導きだした流れの痕跡を、私たちは歴史として記憶す  
 る。ひるがえって、「広範な政治運動と公的な出来事から成る主流から外れた、歴  
 史の脇道、……埃をかぶった過去の片隅は、歴史書の歴史が示す広い眺望のもとで  
 は見すごされてしまう、特異な出来事や物語ストーリーに満ち溢れている……<sup>40)</sup>」。歴史はそ  
 のような私的な事柄を削ぎ落としてしまう。この点では、歴史小説にすら危険があ  
 る。それは物語であるがゆえに、過去の生の実際を陰へと隠しうる。「歴史小説の  
 欠点は、馴染みのないものだという感触、何か遠くのことだという感覚……によっ  
 て、情景の空虚さがあまりにもしばしば容認されえてしまうという事実にある。素  
 晴らしい羽根が、その下にいる鳥の無価値ぶりを覆い隠すこととなるのである<sup>41)</sup>」。  
 だからこそ、「どの時代にもそれぞれの生の問題があること」、「どの状況の社会に  
 も固有な生の経験があり、どの時代の歴史も異なる点で経験と生の問題にはまり込  
 んでいく人間の姿を示すものであって、どの世代も存在に対する自らの姿勢を持っ  
 ていること」に思い至る必要があるわけだが、成功裏に紡がれた歴史小説というの

38) HN: 81.

39) HN: 48.

40) HN: 58.

41) HN: 38.

は、まさにこれを可能にするものなのである<sup>42)</sup>。「小説が過去を扱う一手段として正当とされる真の理由は、語るべき過去の世界なるものがあるという事実を当該小説が読者に思い知らせることにある。そこには躍動に満ちた大切な生の舞台があって、そこで人々は血の通った生身の肉体を持っていたのであり、彼らの悲しみも望みも冒険も私たちのものと同じように現実のものであって、彼らの時間は私たちの時間と同じようにかげがえのないものだったのである<sup>43)</sup>」。この点、過去を知ること、人間の生がより大きな共同性の一部でもあるという事実を思い起こすことでもある。それは、私を公へとつなぐことへと通ずるものである。「〔歴史小説は、〕歴史を、知識の集積に付け加えられるだけのものではなく、私たちの個人的な経験の延長上にあるものにする<sup>44)</sup>」。こうして、歴史と歴史小説との異同をめぐる議論は、想像力という観念を経由しながら展開されることにより、表象を通じてしか世界を捉えられない私たちの生のあり方を、政治的なもののまさにその土台として捉えるに至る。

## おわりに

『歴史小説』の叙述を貫いているのは、諸個人と彼らを取り巻く世界とをめぐる緊張関係である。過去を理解するという、小説もまたその一方途を提供するところの試みは、高度に政治的な色彩を帯びて個人の実存に関わっている。バターフィールドが他者の他者性をどこまで捉えることができているのかについては、疑問を呈することも難しくはないだろう。以上の議論において、歴史は個人の延長でつかみとられるものとされていた。同様の表現は随所に見られる。彼に言わせると、「画家が自然を単に模写するのではないのと同じように、小説家は過去を単に再現するのではない。彼は過去に彼自身を何ほどか込めるのであり、自身の見方を露わにすることなく過去を描くことはできない。これらすべては、真に再生を為し遂げ雰囲気をつかみとる歴史家には誰にでもあてはまることである<sup>45)</sup>」。ひるがえって、歴史に携わる人間は、歴史のなかに自分自身を見いだすこととなる。「彼自身の生

---

42) HN: 34, 38.

43) HN: 95-96.

44) HN: 96.

45) HN: 109-110.

に、歴史のなかで対応するものへと応え、そこに自らの世界を見いだすところの何かがあるのである<sup>46)</sup>。ここにおいて人間は、私的な世界にとどまることをやめはするであろう。しかし、その際にその人間が行っているのは、周囲の世界を呑み込んでいくことなのかもしれない。「ある人格は別の人格と切り離されてはおらず、人間は他の誰からも完全に覆い隠された深い自己を持ってひたすら自らのうちに閉じ込められているなどといったことはないという、まさにそのことを理由として、小説家はいわば自らを自身とは異なる人に移し替えて生をつかみとることができるのである<sup>47)</sup>」。バターフィールドと同じ時代に生きた人物を見回してみた際、例えば1923年に『汝と我』を著していたブーバーのように、自己同一化の暴力に関心を傾ける思想家は、『歴史小説』の執筆時期にも現れていた。バターフィールドが示していた理解は、少なくともその政治思想としての含意に着目した場合、いささかナイーブなものではなかったかと思われる。

しかし、バターフィールドの他者理解について拙速な評価を試みることは控えたい。というのも、彼のその後の思索もまた同じ問題に関わって展開されていくこととなるのであり、そこから導きだされる視座も変化を見ていくこととなるからである。元となる論考が『歴史小説』と同じ時期に書かれ、バターフィールドにとって二冊目の著書となった『ナポレオンの講和策 (*The Peace Tactics of Napoleon*)』(1929年)も、——まさに公的に重要な人物を素材として——個とより大きな世界との緊張関係を扱っていた。この作品は、題名にもうかがわれるとおり、ナポレオンという一個人を軸としてある時代を描きだそうとするものである。その序論でも、ナポレオン戦争の背後に見られた「個性の衝突」を描くことが作品の主題だと述べられている<sup>48)</sup>。(このあたりはまさしくテンパリーの影響なのかもしれないが)「外交をめぐる話は、盛運の浮き沈みを示す真の指標である」というのが、その土台にある発想である<sup>49)</sup>。こうした問題関心は、バターフィールドの主著であり、彼がテンパリーの影響を脱したとされる『ホイッグ流の歴史解釈 (*The Whig Interpretation of History*)』(1931年)にも受け継がれていく。そこでのバターフィールドはもはや、歴史を斥けて小説を擁護するかのとき論述を展開すること

46) HN: 110.

47) HN: 110.

48) H. Butterfield, *The Peace Tactics of Napoleon, 1806-1808*, Cambridge University Press, 1929, p.vii.

49) Butterfield, *Peace Tactics of Napoleon*, p.50.

はない。代わりに彼は、やはり「<sup>インポントラブル</sup>計り知れない」力によって展開されていく領野において、カトリックもプロテスタントもそれぞれに固有の意義を持つような、そうした歴史の流れを見定めようとする。実にそこでは、個の実存と歴史との関係をめぐって前節の最終段落に引いたいくつかの文言が、ほとんどそのままの言葉遣いで繰り返されることとなるのである<sup>50)</sup>。

---

50) この点については、拙稿「国際論的転回は思想史を深め(てい)ない——古典的国際関係論からのポレミック」『政治思想研究』24号(2024年), 49～78頁。本稿は同論文第三節の一注釈に相当する。